人文科教育研究　31　2004年　pp. 31－42

討論における展開と論題に関する研究
――「ＮＨＫ真剣10代しゃべり場」の分析から――

山　谷　浩　光

1　本研究の目的

討論において，所与の論題がどのような話し合われるかについては，島崎隆が以下のように述べている。

「テーマは所与の対象的現実を反映しているから，対象的現実の構造が対話者相互のあり方と討論の展開を規定すると考えられる。テーマとしてたてられた対象の本質と重層的な構造が対話の進行過程のなかで徐々に姿を現してくるのである」(1)

しかしながら，指導者が話し合い指導において最も困難の感じる点の一つは，話し合いの展開を予測できない，したがって効果的な事前・事中指導を行うことができないという点なのである。すなわち，島崎が述べたようには，どのような「テーマ（論題）」が，どのような「展開」を導くのかについてはいまだ明らかにされてはいないのである。

本研究は，こうした話し合い指導上の課題を克服する一つの手掛かりとして，高校生によって行われた討論の実践例を分析することにより，第一に，討論とは，どのような内容の発話が交わされて展開するのか，その発話の特徴を明らかにし，第二に，どのような論題が第一で明らかにした特徴をもつ発話の交わされる討論を導くのかを考察する。

実践例としては，「ＮＨＫ真剣10代しゃべり場」を対象とした。「ＮＨＫ真剣10代しゃべり場」（以下本稿では「しゃべり場」と略称する）は，2000年４月から「ＮＨＫ教育ＴＶ」で放映が開始され，2004年４月で５年目を迎えた，タイトルどおり，出演する10名の「10代」の若者が，相互に提案しあった論題に対して，「真剣」に討論するという内容の番組である。2003年４月からは，毎週金曜日の夜11：30より，45分間放映されている。出演者は３ヶ月で全員が入れ替わり，2004年４月からは14期生である。

この番組を分析の対象としたのは，①討論参加者の中心が高校生である，②発言内容が参加者の自由意思に任されている，③毎週放映があるため分析材料が豊富である，の３点が主な理由である。

また，番組制作に関わる詳細についての調査も行った(2)。この調査結果から，本研究にとって特に重要な点として以下のことを，調査結果資料より抜粋して確認しておく。

－実際の討論時間は，約100分である。番組では，これを30分程度に編集して放映している。編集の方針は「おもしろい部分」を抜粋している。「おもしろい」とは，出演者同士の価値観がぶつかりあい，キャッチボールになっている場面を指す。カットされる場面は，話が脇道に逸れてい

る，論題から外れている，同じことが繰り返されている，という箇所である－

ここから，番組で放映されるのは「討論」全体ではないことは明らかであり，本研究における一つの限界が指摘されるかもしれない。しかし，本研究では，討論において特に「出演者同士の価値観がぶつかりあい，キャッチボールになっている場面」において，どのような内容の発話が交わされているのかを明らかにすることを目的とする研究とすれば，大きくそこからは逸れるものではないと考える。

分析に当たっては，番組で放映された討論場面を中心とし，番組ＨＰ，上述のＮＨＫへの調査から得られた情報を用いた。分析の対象とした討論は，後掲の表-３にある37の論題名による討論である[3]。

本稿では，この中から発話の内容の特徴が典型的に現れた以下の４論題を取り上げ，その分析の内容を要約する。（Ａ～Ｄの記号は，以下の本稿での整理記号）

Ａ論題名№31「男らしくなきゃダメですか？」

Ｂ論題名№32「もっと規則で縛るべきだ！」

Ｃ論題名№33「努力を評価するって変！」

Ｄ論題名№37「男はどーして浮気するの？」

2　討論内容の特徴と分類

出現する発話の内容の特徴を明らかにする上で，分析の枠組みとして熊谷智子の会話分析[4]の手法を用いた。熊谷の枠組みとは，【発話内容・発話姿勢】（４項目）【話し手と相手，および両者の関係】（４項目）【会話の流れの構成】（４項目）という３つのカテゴリー，12の項目に分けたものである。発話一つひとつを move[4]という最小単位に分割し，これらがどの項目にあてはまるかを検討し，発話の内容の特徴を把握するものである。

熊谷の会話分析の特徴は，会話を構成する個々の発話の機能や特徴の分析に重点を置いている点であろう。しかも，抽象的レベルにおける発話の典型的な性格を述べるためではなく，実際の談話に現れる発話の分析を目標とし，上記のように３つのカテゴリー，12の項目という精密でかつ多角的な観点を用意しているため，実際の会話の分析においてその特徴を浮き彫りにできるというメリットがある[5]。

さて，37の論題名による討論に出現した発話を，熊谷のこの枠組みによって分析したとき，以下の４項目に該当する move が多量に出現する討論と出現しない討論が確認できた。

そのカテゴリーと項目は以下のものである。

【発話内容・発話姿勢】

②相手へのはたらきかけの姿勢

2.教示・伝達的（相手に情報を与えようとする）

4.教示要求的（相手に情報提供を求める）

③話題・内容に対する話し手の評価・態度

1. 肯定的（話題・内容をよいこと，好ましいこととして評価）

2. 否定的（話題・内容をよくないこと，好ましくないこととして評価）

④非同調性(話題は転換しないが，相手の向けてきた流れに逆らう)

【会話の流れの構成】

⑫談話構成上のはたらき

あり（談話の開始・収束，話題転換などのはたらきをもつ）

2頁のA～Dの論題名による討論がこの特徴を典型的に示すものとなる。論題名A～Dに出現する4項目のmoveの量を整理すると以下の表のようになる。(表-1)

記号	②	③	④	⑫	分類名
A	◎	×	×	×	討論型Ⅰ
B	○	◎	×	×	討論型Ⅱ
D	○	◎	×	◎	討論型Ⅲ
C	○	△	◎	×	討論型Ⅳ

注－表の記号は以下の意味である。
◎　頻繁に出現
○　標準的
△　不定
×　ほとんど出現しない

上記4項目に該当するmoveの出現量にA～Dのような特徴を持つ討論の分類名を，本稿では表の上から順に「討論型Ⅰ～Ⅳ」と名付ける。

3　4討論型の討論内容の概要

ここではA～Dの討論の具体的な内容を紹介しながら，四つの討論型の特徴を述べる。

3-1　討論型Ⅰ　A論題名「男らしくなきゃダメですか？」

ここでの討論は，論題提案者の，提案の背景が明らかにされながら，最終的には「提案者の内省とアドバイス実行決断の勧め」へと向けて進んだ。話し合われたことの中心は，論題提案者への，他の参加者からのアドバイスである。討論がこうした内容となったことが，「②相手へのはたらきかけの姿勢」のうちの「2. 教示・伝達的(相手に情報を与えようとする)　4. 教示要求的(相手に情報提供を求める)」の量の多くなる理由と考えられる。

討論型Ⅰの一般的な展開を図示すると，以下のような展開となる（図－1）。

1　論題内容（悩み事）の提示（提案者）
↓
2　提案者の情報の提供と、他の参加者からの情報の要求
↓
3　他の参加者からの提案者へのアドバイス
提案者にとってのアドバイスの現実性と実効性の判断
↓
4　提案者の内省とアドバイス実行決断の勧め

1～4は，おおまかに分けた討論展開の段階である。それぞれに表示した内容の発言が主に出

現する。この討論型では，「2」「3」に多くの時間が割かれる。すなわちこの部分が，中心部分と言えよう。そしてこの部分において，「2.教示・伝達的」「4.教示要求的」に該当する move の多発するのである。そして，その内容がこのようになっていた討論として，他には次の論題名のものに確認できた。

9　オンリーワンになりたいと思いませんか？
10　心の中の“モヤモヤ”とどう付き合ってますか？
12　どうしたら自分を好きになれますか？
13　他人と関わることに疲れませんか？
16　コンプレックスをどう解消してますか？
25　どうしたら“ひきこもり”から抜け出せるの？
26　親と理解し合ってますか？
27　本当の自分が出せますか？
28　居場所がない不安わかりますか？
36　成績がいいと嫌われるの？

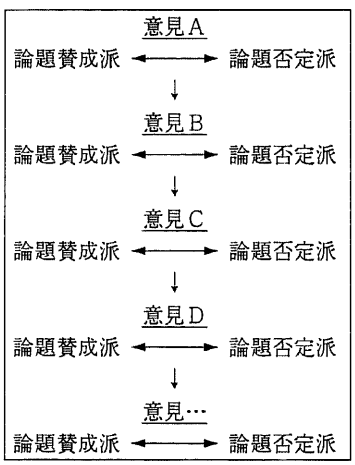
これら11の論題内容を検討すると，一つの共通点が発見できる。つまりこれら11論題は，提案者自身の現在抱える悩みを提示した「人生相談的」論題なのである。

3-2　討論型Ⅱ　B論題名「もっと規則で縛るべきだ！」

この討論では，離婚を防ぐための方法として「規則で縛るべきかどうか」の是非が問われた。

つまり参加者が「論題賛成派」と「論題否定派」に別れ，双方から出し合われた意見を巡って，相互に反論・反駁しあいながら討論が展開したということである。「③話題・内容に対する話し手の評価・態度（1.肯定的　2.否定的）」に該当する move が頻出したのは，このような理由によるものと考えられる。

この討論の展開を一般化して図示すると，以下のようになろう（図－2）。



意見A～…とは，提示された論題をそれを支持する（あるいはしない）根拠，やその効果，理由等を述べた発言である。この意見は賛成派，反対派いずれの立場の者からも提示される。

たとえばこの討論名で，論題賛成派から出された意見としては「両親がそろっていることが子どもにとって一番の幸せである」「罰則があることで，離婚を回避しようと努めるようになる」等があった。一方，論題否定派からは「罰則を設ける前に離婚をしないような倫理観を育てるべき」「離婚できなくなることで新たな問題が生じる」等の意見が提示された。激しい「対決」の見られる討論である。

3-3　討論型Ⅲ　D論題名「男はどーして浮気するの？」

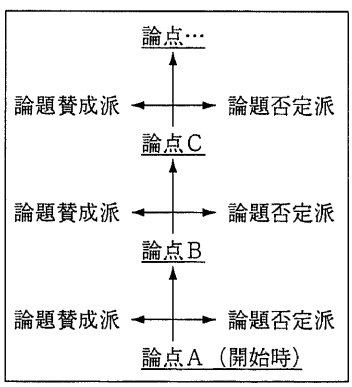
この討論では，10の論点が出現し（「⑫談話構成上のはたらき」に該当する move の頻出），その都度その論点に対する是非が論じられながら進行した（「③話題・内容に対する話し手の評価・態度」に該当する move の頻出）。その展開を，この討論に則して説明する。

「浮気するのはいけない」という論題提案に対して，概括すれば「浮気はいけない」という立場と，それは理想であって浮気は仕方ないという立場との対立する段階である。すなわち論点①から⑤までである。この対立の中から，結果として恋愛の本質論への第一歩とも言うべき「では，恋愛とはいかなるものか」という問が生まれるのである。ここまでが第一段階と言えるだろう。

次に，この第一段階で生まれた「恋愛とはいかなるものか」とい問に対して，⑥から⑨までの四つの論点で討論がなされる。そして今度は「では，理想の恋愛とは，どんな恋愛か？」という問が生み出されるのである。これが第二段階である。

そして，論点⑩では，この「理想の恋愛とは，どんな恋愛か」という問を巡っての討論となったのである。これが第三段階である。

この討論では，以上のように，論点は次々に具体的なものから抽象的へ，また個別的なものから普遍的なものへと積み上げられてゆくのである。討論Ⅱが，一つの意見に対する単純な相互批判が続き，次々に提示される意見には必ずしも前後の脈略はなかったが，この討論では常に前に論じられた結果を踏まえ，一段階レベルずつアップしながら討論内容が深まってゆくという特徴があった。この討論の展開を一般化して図示すると，以下のようになろう（図－3）。



論点Ａは，討論開始時の論点である。この論点に賛成派と反対派が互いに意見を交わす。この中が生まれたのが論点Ｂである。そしてこの論点Ｂを巡ってまた賛成派と反対派が互いに意見を交わすことになるわけである。そして次に，論点Ｃ，論点…と論点は積み上がり，その過程で論題内容に潜んでいた普遍的・本質的問題点が姿を現してくるのである。

この図では，討論の発展の方向を，下から上へと表示し，意見が積み上がってゆくというこの討論の特徴を表した。

3-4　討論型Ⅳ　Ｃ論題名「努力を評価するって変！」

この討論での最大の特徴は，延べ19の具体的事例が提示されることである。これらの事例を分析すると，具体的事例の提示には，ある意図のあることに気付くのである。すなわち，具体的事例を提示する発言者は，その時点における論点の微妙な「ずれ」を修正しようとしているということである。そしてその「ずれ」には次の２点があるようである。

その一つは，努力と評価の行われる「場」についての確認である。学校もその一つの分野として含む社会という「場」を想定しているか，学校のみを「場」として想定するかである。もう一つの点は，結果と努力との定義についてである。実はこの討論では，どちらの点についてもその定義が曖昧なまま議論が進んでいるのである。

この討論を概括すれば，以上のように結果と努力との定義と，努力と評価の行われる場という，二つ点での共通の基盤を求めて，これらが錯綜しながら展開した討論したと言えるだろう。こうした意味において，参加者たちは提案者が意図した論点を共有できず，論題の求める方向には展開しなかった討論として不本意な討論であったのである。

こうした不本意な討論の特徴は，「④非同調性(話題は転換しないが，相手の向けてきた流れに逆らう)」に該当する move の出現であった。この討論では，この move を５回確認できるが，すべては具体的事例を述べた発話の中に見られた。

3-5　対象とした討論の討論型の確定

以上より，分析の対象とした37の論題名による討論をその特徴から分類した。

後掲の表-３に確定した結果がある。

4-1　論題内容の分析と分類

次に，論題内容の分析を行う。この時，論題内容に対して，以下の２観点４項目を措定した。以下に提示した「観点①」「観点②」の順に，論題内容を整理し整列したものを，以下では「観点別整理列」と呼ぶことにする。

●「観点①論題提案者の意識」

1　論題内容に対する確信：弱ー他の人からの意見が欲しい。
2　論題内容に対する確信：中ー他の人の意見を参考にしたい。
3　論題内容に対する確信：強ー他の人に自分を意見を知ってほしい。

観点①の措定の意図は，「しゃべり場」においては論題は番組参加者が提示するため，その際の論題内容に対して，提案者自身の意欲・態度・自信がどのように討論の展開に影響を及ぼすのかを量るためである。

●「観点②提案内容」

ア　提案内容に問題意識を抱くきっかけとなった具体的事例が含まれているか	ある（Y）	中途半端，或いは，ない（N）
イ　論題提案に二者択一で答えられるか	はい　（Y）	いいえ　（N）
ウ　主張内容が，向社会的か反社会的か	向社会的（A）	反社会的（B）

観点②は，論題提示者が他の参加者に論題内容をどのように提示したかを量るものである。ア～ウまでの項目内容の差が討論の展開にどのような影響を与えるかを見た。

4-2　各論題内容の分類

分析例として先述した論題名A～Dを取り上げる。論題名A～Dの提案内容と討論したい意図は，要約すると以下の通りである[7]。

A「男らしくなきゃダメですか？」

小学校の頃から「男らしくない」「女っぽい」と言われ，みんなから見下され，ずっとどうしたらいいか悩み続けている。他の参加者にその悩みを聞いてもらい，どうしたらいいか助言してほしい。

B「もっと規則で縛るべきだ！」

2年半前両親が離婚し，辛い生活を送っている。離婚する夫婦には罰を与えるべきだと思う。僕の両親も，罰則があったら，家庭を維持する方法を本気で考えたと思う。人間はもともと弱いから，何でも厳しい罰則でしばった方が社会は良くなると思いませんか？

C「努力を評価するって変？」

私は日本の教育には矛盾があると感じている。人は誰でも公平にチャンスが与えられているのだから，努力したかどうかよりも，結果で人を評価するべきだと思う。もっと結果主義を徹底すべきだと思いませんか？

D「男はどーして浮気するの？」

私の男友達は全員が浮気していて，それを自慢げに話す。同世代である10代の男たちが「浮気は悪いことではない」と考えている。浮気は悪いことではないと考える風潮が許せない。そういう風潮はおかしいと思いませんか？

これが，A～Dにおける，論題提案者が他の参加者に提案した論題内容の主旨である。さらに放映中には提案理由の背景が映像で解説される。これらも考慮し，前述の観点に沿って各論題名ごとに分析・分類したものが，以下の表である（表-2）。

記号	論　題　名	①	② ア	イ	ウ
A	男らしくなきゃダメですか？	1	Y	Y	A
B	もっと規則で縛るべきだ！	2	Y	Y	B
C	努力を評価するって変！	2	N	Y	B
D	男はどーして浮気するの？	2	Y	Y	A

上記の観点を，前述のような考慮を加え，左の表のように判定した。そして分析の対象とした37の論題名の論題内容を分析・分類して，それぞれの論題名の観点別整理列を，後掲の表-3に載せた。次節で，論題内容と討論型の相関関係を考察する。

5　4討論型と論題内容の相関関係について

これまでに幾度か言及した後掲の表-3は，分析の対象とした37の論題名による討論の「討論型」と，各論題名で提示された論題内容の相関関係を一覧にしたものである。

この一覧から，次のような相関関係を確認できよう。

5-1 「観点①論題提案者の意識」が主導する討論型について

まず「観点①論題提案者の意識」によって導かれる討論型があることが明らかであろう。すなわち，次のような相関関係である。

「1　論題内容に対する確信：弱－他の人からの意見が欲しい」	→	討論型Ⅰ
「3　論題内容に対する確信：強－他の人に自分を意見を知ってほしい」	→	討論型Ⅱ

この結果から，他の参加者は，論題というより，論題提案者の意欲・態度・自信が反応しているのだと考えられる。つまり「意識1」の場合ならば，提案者は他の参加者からの意見を求めているのであるから，「4.教示要求的（相手に情報提供を求める）」そしてその応答である「2.教示・伝達的（相手に情報を与えようとする）を含む発話が多くなるのである。また「意識3」の場合は，提案者の確信の強さが他の参加者の反発を招くためと考えられる。4頁の図-2で示した「論題賛成派」と「論題否定派」の対立は，論題提案者の意識が「3」の場合，「論題提案者」と「他の参加者」の対立となることは，分析例の五つすべてに見られるものであった。

したがって，論題提案者の意識が「1」「3」と確認される場合，観点②における各項目の差は，討論型の確定には問題にならないと言えるだろう。

実際に意識「1」が討論型Ⅰを導いた討論においては，3頁図-1中の「1」から「2」へ間において，各項目の差によって討論型Ⅱ～討論型Ⅳ的な様相を呈することが確認できる。しかし，「2」以降は，3頁図-1に示したような展開に収束してゆく。

また意識「3」が討論型Ⅱを導いた討論においては，提案された意見において対立するのではなく，前述のとおり提案者の人間性の部分において対立する。よって，参加者にとっては観点②がいかなるものであろうと，「まず反対」から始まるのである。すなわち観点②の差は，提案者の強烈な意識への反発が顕在化するため，項目の差は討論内容に反映されないのである。

5-2 「観点②提案内容」の差によって生じる討論型について

前目で観点①の中で，特定の討論型を導かなかったのが意識「2」であった。つまり，「論題内容に対する確信：中ー他の人の意見を参考にしたい」という意識は，討論型Ⅱ，討論型Ⅲ，討論型Ⅳのいずれかを導いている。そして，それぞれの論題において討論型を決定している要因が，観点②の差であることは，表-3から読み取ることができる。そして観点②の整理列の差が次のように討論型と相関していることが明らかであろう。

「ＹＹＢ」（具体例あり・二者択一可能・反社会的主張）の場合	→	討論型Ⅱ
「ＹＹＡ」（具体例あり・二者択一可能・向社会的主張）の場合	→	討論型Ⅲ
「非ＹＹＡ」「非ＹＹＢ」の場合	→	討論型Ⅳ

ここで，討論型Ⅳを導く観点②の表記について説明しよう。

表-3から言えば，次のように表すのが適当だろう。

観点②「ＮＹＡ」（具体例なし・二者択一可能・向社会的主張）の場合 → 討論型Ⅳ

観点②「ＹＮＢ」（具体例あり・二者択一不能・反社会的主張）の場合 → 討論型Ⅳ

どちらも項目ウ「主張内容」の立場を明確にしているが，実はその相違（向社会的か反社会的か）は討論内容には影響は与えないと考えられる。なぜなら，3節に述べたように，「具体的事例」が「ない」場合，討論は「具体的事例」を求めて展開することを説明した。また，「二者択一」で「答えられない」場合，二者択一で「答えられる」問を求めて討論は展開することは，論題名No.33「みんな社会の中で生きていることを忘れてませんか？」で確認できる。つまり，「具体的事例」と「二者択一」が「N」になった場合，討論はそれらを補おうとする方向に討論が進むため，提案者の主張内容に対する意見を述べあう段階までには至らないのである。また「具体的事例なし」「二者択一不能」という論題もあり得ようが，そのような討論の例がないため詳細は不明である。しかし，討論の展開を想像することは困難ではない。

したがって，討論型Ⅳを前述のように一本にまとめることができるのである。

6 考察と今後の課題

本稿の研究で明らかになったことは，次の2点であろう。

①討論に出現する発話の特徴から，討論の展開は四つに分類できる。

②論題内容と討論の展開には，強い関係性を確認することができる。

しかしながら，この成果を討論指導に生かすためには次の各点を今後の課題として検討してゆかなければならないであろう。

1）存在する討論型として四つに分類したものの，すべての討論実例がこの四つの範疇に分類するのが適当であるかどうか。例えば，討論型Ⅱにおいて，提案者の意識が導く場合と観点②が導く場合があることは，5節で述べたとおりであるが，同じ討論型Ⅱとしたままでよいか分類すべきかどうかも問題であろう。また，討論型Ⅳにおいても，多くの場合，討論がうまく展開しなか

った場合は，この型に入れることになろうが，果たしてうまく展開しない討論はすべてこの型に分類してよいのか。討論型の分類を今後も検討する必要があろう。

2）観点②各項目の判定の基準をさらに明確にする必要があろう。例えば項目ア「具体的事例」の有無は，討論型Ⅱ・Ⅲと討論型Ⅳの分岐点となるが，参加者個々の能力，生活環境，興味関心の差によって，提示する内容にどの程度の具体性が必要なのかが常に異なるであろう。よってさらに具体的事例の必要の程度を量る下位項目を立てられれば，項目アの判定の精度，逆に言えば想定した討論型への指導がより有効になるだろう。

これは，項目ウの判定においても同様である。この項目の判定の難しさは，一つには，主張内容の判断者が参加者であることである。指導者には「向社会的」と判断されることが参加者たちには逆となることは，その参加者が高校生の場合では，十分あり得ることであろう。第二に，どちらとも判定の困難な主張内容であった場合はどうなるのかということである。この項目は討論Ⅱと討論Ⅲを分ける分岐点である。そうした点からも指導者がこの項目に対し容易かつ正確に判定の下せる観点となるようさらに改善してゆく必要があろう。

（表-3）　　討論型と論題内容の相関　関係表

No	論　題　名	討論型	観点別整理列				備　考
9	オンリーワンになりたいと思いませんか？	Ⅰ	1	N	Y	B	「-」は，判
10	心の中の“モヤモヤ”とどう付き合ってますか？	Ⅰ	1	N	N	-	定不能。
12	どうしたら自分を好きになれますか？	Ⅰ	1	Y	N	-	
13	他人と関わることに疲れませんか？	Ⅰ	1	N	N	B	
16	コンプレックスをどう解消してますか？	Ⅰ	1	Y	N	-	
25	どうしたら“ひきこもり”から抜け出せるの？	Ⅰ	1	Y	N	-	
26	親と理解し合ってますか？	Ⅰ	1	Y	Y	B	
27	本当の自分を出せますか？	Ⅰ	1	Y	Y	B	
28	居場所がない不安わかりますか？	Ⅰ	1	Y	N	A	
31	男らしくなきゃダメですか？	Ⅰ	1	Y	Y	A	Ⅰ型分析例
36	成績がいいと嫌われるの？	Ⅰ	1	Y	Y	B	
4	お小遣いもらうのやめませんか？	Ⅱ	3	Y	Y	B	
11	みんな我慢が足りない！	Ⅱ	3	N	Y	A	
17	親の期待に応えるのやめませんか？	Ⅱ	3	Y	Y	B	
18	仕事って何だと思いますか？	Ⅱ	3	Y	Y	B	
29	みんなもっと体を鍛えるべきだ！	Ⅱ	3	Y	Y	-	
1	離婚っていけないこと？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
2	遊ぶために大学行っちゃダメですか？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
3	義務教育なんていらない！	Ⅱ	2	Y	Y	B	
6	みんな自己主張しすぎじゃない？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
7	結婚って何のためにするの？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
8	高校中退ってダメなこと？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
15	ウソをついちゃダメですか？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
20	損得で人とつきあっちゃダメですか？	Ⅱ	2	Y	Y	B	
21	お金が無くては幸せになれない！	Ⅱ	2	Y	Y	B	

23	ゆとりより競争が必要だ！	Ⅱ	2	Y	Y	B	
32	もっと規則で縛るべきだ！	Ⅱ	2	Y	Y	B	Ⅱ型分析例
5	身体障害者という言葉を使うのやめませんか？	Ⅲ	2	Y	Y	A	
19	イメージで人を判断しないで！	Ⅲ	2	Y	Y	A	
22	自分らしいファッションしてますか？	Ⅲ	2	Y	Y	A	
24	“かわいそう”って何？	Ⅲ	2	Y	Y	A	
30	人を判断する基準って何？	Ⅲ	2	Y	Y	A	
37	男はどーして浮気するの？	Ⅲ	2	Y	Y	A	Ⅲ型分析例
34	他人のことは無関心でいいの？	Ⅲ	2	Y	Y	A	
14	みんな社会の中で生きていることを忘れてませんか？	Ⅳ	2	N	Y	A	
33	努力を評価するって変！	Ⅳ	2	N	Y	B	Ⅳ型分析例
35	正しいことなんてない！	Ⅳ	2	Y	N	A	

注

（1） 島崎 隆（1993）「対話の哲学　議論・レトリック・弁証法」 こうち書房　p. 82

（2） 筆者が2003年７月20日と８月７日の両日，東京・渋谷のＮＨＫ放送センターを訪問し，番組の収録を見学し，プロデュサーへ番組作成に関してのインタビューを行った。

（3） これら37の討論は，2002年４月から2003年８月にかけて放映された，第７期生から11期生のものである。論題名等の情報はしゃべり場 HP「http://www.nhk.or.jp/shaberiba/」によって検索できる。なお表-１における「No」は放映順に従って施された番号であり，本稿での整理番号としても用いている。

（4） 熊谷智子（1997）「はたらきかけのやりとりとしての会話」『対話と知：談話の認知科学入門　茂呂雄二編』 新曜社　pp. 21－46

（5） 中田智子（1990）「発話の特徴記述について―単位としての move と分析の観点―」『日本語学 1990　11月号』明治書院　pp. 112－118

（6） 中田智子（1991）「発話分析の観点―多角的な特徴記述のために―」『国立国語研究所報告 103 研究報告集 12　1991』 秀英出版　pp. 279－306

（7） 注３に引用した HP「http://www.nhk.or.jp/shaberiba/」に掲載してある情報を中心に編集した。

【主な参考文献】

大村はま（1983）「初歩段階の討議指導にはどんな話題がよいか」『大村はま国語教室第２巻』筑摩書房　pp. 367－384

甲斐雄一郎（1994）「教材化研究の視点」『中学校の表現指導』 東洋館出版　pp. 16－29

倉澤栄吉（1970）「対話の指導」原名は「国語科 対話の指導」 新光閣書店　1970
（引用は「倉澤栄吉国語教育全集第10巻」 角川書店 1989　pp. 417－496から）

高橋俊三（1994）「コミュニケーション能力育成のための話し合い活動」『月刊国語教育研究

1994.4 №264』 日本国語教育学会編　pp.4－9
増田信一（1994）「音声言語教育実践史研究」 学芸図書
湊 吉正（1972）「音声言語教育の創造性の開発」『季刊国語教育誌　第2巻第1号』 新光閣書店　pp.6－16